

# 北の事務から 2011 連携

～ふらのフォーラムに参加して(後編)～

特別企画  
PART 2



## 富良野

天野 修

北海道鷹栖町立北野小学校

## Synopsis 前編のあらすじ

昨年7月、富良野市の学校間連携会議に石狩市・北見市などの事務職員が視察に訪れ、交流を図る機会がありました。その夜の懇親会で、「飲んだくれ達」が思いつくまま次々と口にしたことが、1年後現実になります。

「ふらのフォーラム」と名付けられたこの集いに、尾崎公子さん（兵庫県立大学環

境人間学部教授）をお招きし、130名を超える参加者を集め、7月28・29日の両日開催されました。

フォーラム1日目、あらかじめ設定された3本のテーマ毎に、尾崎さんによる30分程度の講演が行われた後、校長・教諭・養護教諭・事務職員・道立高校事務長・市教委係長の6名の協力者やフォーラム参加者により論議がすすめられ、テーマは最後の3本目へと入りました。

### 〈テーマ3「切り結ぶ学校事務 ～学校変革を求めて～〉

1日目最後のテーマの「切り結ぶ学校事務」は、持田栄一さんが用いた言葉です。尾崎さんからは、持田さんの理論をもとに

学校事務をすすめてきた北海道の取り組みについて、教育課程と学校事務との関係について、学校分権がすすむイギリスにおける学校マネージャーについて、最後は子どもと大人の関係性に至るまで、さまざまなアプローチからお話がありました。このテ

ーマについては、以下の点にしぼっての論議がすすめられました。

- 1 校内における各職種間の関わりについて
- 2 子どもの権利条約が生きる学校づくりとは

協力者の養護教諭からは「北海道の事務職員は教育を意識しながら仕事をすすめている。子どもたちとの関係性に非常に気がつかっていて、いつも子どもたちの側に立っているのがわかる」。同じく協力者の事務職員からは「権利条約を意識しながら教職員間で意見を交わし、学校行事の在り方や予算について生徒と話し合いをすすめた。これまでの垣根を取り除き、生徒と一緒に学校をつくることを確認した」との話がありました。

参加者からは、「持田さんが提唱していた教育変革としての学校事務というものを、生徒会や学校行事を通じて生徒との関係で感じた。その場しのぎの大人の配慮ではなく、子どもにも考えさせ、計画性を持たせながら行動させることで、職員全体でも体感できた。その後の予算要求についての職員会議で、次々と実感のこもった反省が出てきて、担当者として溜飲を下げた」との発言がありました。

最後に尾崎さんが「ボルノウというドイツの哲学者の概念で「被包感」というのがある。子どもが育つ上で包まれ感があるか。単に人だけではなく、自然などを含みこんだ被包感を感じられるか。それを総合的に捉え、包まれ感を地域や家庭や学校がつく

っていけるかが重要」と1日目の感想を話されました。

ここで昨年、PTA関係の大きな規模の研修会に参加した時のことを思い出しました。研修会ではたくさんの実践発表がありましたが、その多くは不審者対策など子どもを危機から守る取り組みに関わるものでした。その中で唯一、PTAと児童と一緒にグラウンドに芝の種をまき、数年かけて芝一面のグラウンドをつくったという実践が発表されました。

この実践に触れ、未だにこのような学校があることが嬉しかったと同時に、理想的な子どもと大人の関係や地域と学校の関係が垣間見られ、大変うらやましく感じました。また、子どもたちはいつまでもこの出来事を忘れることはないだろうと確信するとともに、大人や地域への強い誇りや確かな信頼感を抱いたのだろうと勝手に想像しました。

子どもの命を守ることは大人の重要な使命ですが、子どもの心を育てることも大人の大切な使命です。世知辛く殺伐とした世の中ですが、今一度、私たち大人が子どもにしてあげられること、そしてやらなければならないことを真剣に考える必要があると感じました。

1日目終了後、富良野市北の峰で懇親会が開かれました。屋外バーベキューで「ふらの牛」やオホーツク産の海産物に舌鼓をうち、市教委からいただいた「ふらのワイン」などを美味しくいただきました。あいにく、途中で雨が強くなりましたが、そこはさすがに事務職員。すばやく市内の学校から借用してきたテントを3基立て、雨を

しのぎました。尾崎さんをはじめ協力者の方々も遅くまで参加され、学校事務を肴に懇親を深めました。

## ふらのフォーラムの様子

2日目（7月29日）

### 学校間連携会議交流会

2日目は学校間連携会議の交流から始まりました。石狩・北見・富良野の3市の取り組みの報告は、「組織だった活動の内容・市町村教委との関わり・今後に向けて」の3つの観点に沿って行われました。

#### 〈石狩市〉

学校財政と学校事務に関して状況調査を行っている。具体的には、①校内配分決算並びに校内配分予算状況調査、②学校職員配置状況調査、③保護者負担調査、④各種補助金調査などである。

予算要望に関しても、「教育財政に関する調査」を事務職員以外の職員に実施し、施設設備面に対する現状認識や、保護者負担に対する認知について資料化をしている。保護者負担に関しては、「負担は減らすべきだが負担すべき経費もある」「ある程度の負担は必要である」という回答が半数以上あり、このままの意識では私費負担はなかなかなくなるのではと改めて考えさせられた。

提言に関しては、2010年度に連携会議として初めて7項目の提言を行った。項目は連携会議の中で設定しているが、これまでの調査結果等を見込んで、現状認識に立った提言とすることを心掛けている。これまでは、市教委に対する提言というものがほ

とんどだったが、今後は、学校や事務職員自身に対しての提言も行っていきたい。提言が実際に制度改正につながったことはまだないが、市教委の職員によっては「おっしゃることはもっともなんだけどね」という回答もある。今後、議論のきっかけになればと考えている。

市教委との関わりでは、2年前から連携会議の事務局長が、提言を教育長や市議会議長に直接手渡ししている。連携会議の招集については、教育長と連携会議事務局の連名で出しているという状況である。

#### 〈北見市〉

制度として学校間連携をどうつくっていくかということに主眼をおいてきた。学校間連携の要綱案を事務職員側で作り、市教委とともに検討をすすめ策定した。

連携会議では業務の処理を推進する、効率化を求めるということではなく、一同に集まって協議をする中で、課題を浮き彫りにしていくことを第一の目的にしている。同じ課題で何度も集まって協議をするという意味では、スピード感のある改善策はなかなか生まれてこないが、会議の性格上それをメインに据えて会議をすすめている。

具体的には、個人情報保護と保護者負担軽減の2つの課題を継続してすすめてきた。もう1つは教育予算について、連携会議として声を出していこうということで、大きな意味の教育予算、配当予算を含めて今年度から取り組みをすすめている。

市教委との関係では、市内の全保護者向けに連携会議だよりを作成し、配布していたが、市教委の方から「待った」がかかっ

た。各学校から提言をしていたが、市教委としては自分たちで会議招集をして、自分たちに提言をするということがおかしいのではということになったようだ。学校間連携として地教委とどのような関係性をつくっていかなければならないか、ある意味原則的な部分で課題を抱えている。

これから学校間連携の行き着く場所というのは、政策提言だと考える。学校からの政策提言にもっていければ、学校間連携のそのものが制度として高まっていくのではないかと考えている。

#### 〈富良野市〉

組織としては、全体会議があり、その横に教育委員会・連携校会議がある。そこから全体連携部会・財政財務部会と教育情報部会の3部会にわかれている。各部会の活動が中心となり会議をすすめているが、年度末に自己評価的に全員が評価をしている。

今年度は財政財務部会での備品費のとりまとめをすすめている。新設特別支援学級備品の予算に関して、市教委からの配当をもとに、財政財務部会が連絡調整しながら各学校の必要金額を洗い出し、有効な活用方法を探っている。その他、PCソフト備品費などでもとりまとめをすすめている。また、各学校の備品の使用状況についてアンケートを実施している。限られた予算の中で、市内全校でミシンを揃える必要があるのか。時期をずらして貸し借りをしながら授業を行えないか。などのアンケートの結果をもとに、これからどのように備品の整備をすすめるか考えていきたい。

最大の武器は市教委との良好な関係である。昨日も係長から学校との連携を重んじる発言があったが、これからもこの関係を継続・発展させながら子どもたちの育ちや、学校づくりを視野に入れながら連携会議をすすめていきたい。

今後の課題は、個人の取り組みの深化であるが、連携会議で一層の交流をしながらすすめていきたい。もう1つは、学校間連携会議の広がりである。事務職員だけの連携ではないことを前提にしているが、他職種との協力であるとか、さらに発展する余地があるのかななどを視野に入れてすすめていきたい。

3市からの報告を聞き、尾崎さんより感想を含め以下のような話がありました。

北見市の連携会議の「学校発の政策提言をするような機関になれば」との発言が印象に残った。そのためには、現場と市町村教委と連携会議の組織間の関係をどうつくっていくのか。現場の声がなかなか届かないならば、その現場の声をいかに届かせるのか。その機能を学校間連携会議が果たすならば、どのような位置にあるべきなのかという組織の問題と、それから政策提言するにはデータ収集をし、まとめるということが絶対必要になる。データ分析は技術なので、できるだけ揃えておいた方が良い。それぞれの連携会議ですすめられている学校徴収金の調査、補助金の調査などはとても重要である。

その後、学校事務の在り方や学校間連携

のすすめ方について、参加者全員から一言ずつ発表がありました。学校間連携の提起以来10年近くが経過しますが、目的や狙いこそぶれていないものの、個々の捉え方や取り組む姿勢にもまだ温度差があることがわかりました。そのことは参加者だけでなく、尾崎さんにも容易に理解していただけたと思います。

尾崎さんが最後のまとめの中で「私への宿題は、成果や数値が求められる時代に、効率を打ち砕くような理論なり形があるのかということ」と語っていましたが、それは同時に、私たち事務職員にも、学校間連携にも課せられた課題と重く受け止めました。

学校や事務職員をとりまく状況が刻々と変化する中、少なくとも「何かをしなければならぬ」という気持ちだけは一緒だと思います。ならば今後どうしていくのか。これまで続けてきた北海道の学校事務を「一人ではできない」というのであれば、「今まで通りのやり方なり、考え方では通用しなくなる」というのであれば、どうしていくべきなのか。北海道の事務職員一人ひとりが現実に向き合い、真摯に未来を展望しなければならないと考えます。

## さいごに

昨年11月、東京で行われた「第3回てらこやフォーラム」に参加しました。その様子を北海道公立小中学校事務職員協議会の広報誌に、「現状のままではダメという危機意識のもと、実践や講演などから何かを吸収し、自己変革を図ろうとする参加者の

真摯な姿を目の当たりにして、北海道もこういう姿を見習うべきだなと素直に思いました…」という内容で寄稿しました。

北海道では協議会主催の全道規模の研究大会を年に一度開催しており、今年で61回を数えました。また、全道に19ある協議会の支部のほとんどで、年に数回の研究会を開いています。

その他、市町村規模などでの研修会も適宜開催されており、この研修の成果が北海道の学校事務の礎となり、財産になっていました。しかし、残念なことにこれらの研究会・研修会への参加者が年々減少しています。

事務職員として経験を重ねる毎に「仕事への意識」や「事務職員観」が固定化され、「自分は一人でも大丈夫」という大きな勘違いのもと、北海道では誰にでも当たり前のように与えられている研修の機会を、当たり前のように粗末にしている現状があるのです。

現在の北海道の事務職員の年齢構成をみると、その40%以上が50歳代以上です。ここ数年で大幅な世代交代が行われると予想される中、先人たちが築いた財を散々食いつぶしておきながら、「何一つ良いことが



ない」と口癖のように言っている私たち50歳以下の世代ですが、裏を返せば「何一つ創り出していない」世代とも言えます。

何かを新たに創り出すことは容易なことではありません。創り出すことが難しいのなら、積極的に人から学ぶことくらいは誰もができるはずです。人の取り組みや実践を真似ることもできるはずです。先人も同じように「まねぶ」ことを続けて、北海道

の学校事務を育んできたに違いありません。「まねぶ」ことすらできないようでは、北海道の学校事務に未来はないと言わざるを得ません。

これからも、北海道の事務職員が「まねぶ」姿勢を当たり前のように持ち続けることや、今回のフォーラムのような研鑽や交流の場を当たり前のように大切に継続することを、心から願わずにはいられません。

---

富良野からの帰り道、小高い丘に車を停めて空を眺めた。

大きな綿菓子のような夏の装いをした雲で空が覆われていたが、それでも良かった。幼い頃は雲一つない青空が好きだったが、大人になるにつれ、雲を見るのが好きになっていた。草原に腰を下ろし、雲を眺めていると、鳥のさえずりや虫の声が聞こえ、吹く風はどこまでも心地よかった。牧草の青臭さが鼻腔をくすぐり、幼い頃の遠い夏の記憶がよみがえった。

自分の周りの季節はあの頃と何一つ変わっていなかった。

何だか少しだけほっとして、そこから町を見下ろすと一何もかもがちっほけに思えた。

拝啓 『学校事務』編集長 木村拓様

これが今年の夏の「ふらのフォーラム」の様子です。

東京はまだまだ暑い日が続くと思われま<sup>そちら</sup>す。どうかご自愛のほど。

今度お会いできるのはいつの日になるのでしょうか。またその時まで。

木村さん、今日も雲がきれいです。でも一

純と蛍の母親が見たっていう雲は、どれだか分かりません。

---

### ●ふらのグラフィティ

富良野の街はここ10年ですっかり変わった。「まだ子どもが食っている途中でしようが！」の五郎の名台詞で有名な「三日月食堂」は店をたたみ、蛍が勤めていた「協会病院」も駅裏に移転した。さまざまな出会いと別れを演出した駅周辺は整備され、街の中心部には大型ショッピングセンターや観光複合施設ができ

るなど、ずいぶんと便利になりあかぬけた。

それでも富良野に来ると、時間がいつもよりゆっくりながれているような気分になる。それは何故だかはわからないが、それが富良野の魅力なのだろうか。「疲れたらいつでも帰って来い。息が詰まったらいつでも帰って来い。国に帰ることは恥ずかしいことじゃない」一。そんな五郎の台詞が今年の夏はやけに胸にしみ

た。

テレビドラマ「北の国から」が今年で放映30周年を迎えた。「気がつけば 今五郎の生き方」。こう題して、富良野ではこの一年、「北の国から」に関連したさまざまなイベントが行われている。物質的な豊かさに警鐘を鳴らし続けていた主人公「黒板五郎」の生き方が今また注目されているようだ。

一方で、まやかしの豊かさのために、相変わらずこの国の人々は、ウソをついたり、人を裏切ったり傷つけたり、罪や過ちを犯し続けている。30年前のバブル景気突入直前も、一過性の豊かさをたらふく経験し、未曾有の大震災と原発事故に見舞われた現在も、人の心はそう簡単

に変化をしなかったということなのか。

「がんばろう！日本」一。愚かな政争や企業のエゴや溢れるゴシップにより、世の中を覆い尽くすエールがほやけつつある中、五郎は30年間、口には出さずとも「がんばれ！」と、日本の片隅の「北の国から」僕らの背中を押し続けているのかもしれない。

#### ■Special Thanks

石狩市学校間連携会議・北見市学校間連携会議・富良野市学校間連携会議

名達和俊（北見市立光西中学校事務職員／無許可Tシャツ販売人）

山本孝暢（富良野市立樹海中学校事務職員／無許可原稿依頼人）

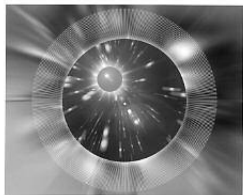
「2011ふらのフォーラム」に関わったすべてのみなさん

# カリキュラム経営を支える学校事務

宮前 貢・浅川晃雄・川崎雅和/著 B5判 定価2,520円(税別)

## カリキュラム経営を支える学校事務

宮前 貢  
浅川晃雄  
川崎雅和



カリキュラム経営を支える学校事務とは何か？校長経験者と優れた実践家が、わかりやすく解説。理論と実践がこの一冊でわかる。

主な内容

- I. 学校の教育活動とカリキュラム
- II. カリキュラム経営に参画する「実践」
- III. カリキュラム経営を支える財務事務
- IV. 学びの多様化を目指した校舎建設の記録

学事出版